



COSSSS report

Chuetsu Organization for Safe and Secure Society.

公益社団法人 中越防災安全推進機構 機関紙

2016 初夏

VOL. 14

中越の経験を熊本・大分へ 心の通い合う支援を



—熊本市東区の避難所の様子—

先遣隊が各地の避難所をまわり、状況把握と支援ニーズの聞き取りを行いました

contents

P2-3 特集①

東日本大震災から5年

復興祈念特別企画展「忘れない」を開催しました

P6 シリーズ防災教育の現場から 第7回「新潟市「防災教育」教員向け実施報告会兼研修」

P7 シリーズ人 会田 理恵子 さん（地域活動サポートセンター柏崎）

P8 シリーズ4コマまんが「川口の春」

P4 特集②

熊本地震被災地支援活動のご報告

当機構職員が先遣隊として熊本市・益城町で活動して参りました

P8 インフォメーション、施設のご案内、会員募集

別企画展「忘れない」を開催しました



長岡震災アーカイブセンター
きおくみらい



おぢや震災ミュージアム
そなえ館



川口きずな館



やまごし復興交流館
おらたる



かしわぎ市民活動センター
中越沖地震メモリアル
まちから

よろず医療会「チームませう」と中越メモリアル回廊

チームませうは、20年前に結成され新潟市を中心に活動していた「新潟よろず医療会」を前身に、東日本大震災を契機にさまざまな支援活動を行っていた人々がつながって、多業種による復興支援団体「チームませう」として結成されました。以来、平成23年の東日本大震災の発災直後から現在まで、東北各地の被災地との交流・支援活動を続けています。

チームませうは、「なんでもやっちゃいましょう！」→「はい！やりませう！」という合い言葉の元、現在も定期的に被災地を訪問し、不自由な生活の続く被災地住民の心のケアなどを中心に幅広いプログラムで活動を続けています。

平成24年2月の初訪問から平成28年まで、のべ9回に渡って「チームませう」は岩手県陸前高田市を訪れ、医療支援だけではなく、餅つきやバーベキュー、子ども達とのふれ合いや、時には落語の上演など、さまざまな活動を通じて交流を深めてきました。また、平成26年には2度にわたって陸前高田市から中越大震災の被災地を訪れ、被災住民同士の交流にまで発展しています。



集会所でのマッサージや傾聴活動、
子どもたちとのふれあい

中越の地域再生を、陸前高田の復興のヒントに

平成26年からは被災から10年の節目を迎えた中越地域の復興のまちづくりの歩みと経験を陸前高田市のみなさんに伝えようと、チームませうが交流の架け橋を担って、長岡市川口地区の住民との交流事業が始まっています。今回の特別企画展ではチームませう活動紹介と併せて、川口地区の交流の足跡を川口きずな館、長岡震災アーカイブセンターきおくみらいで特集して紹介しました。



震災10年・越後川口みらい会議への参加



川口地域住民との意見交換

東日本大震災から 5 年 復興祈念特別



平成 23 (2011) 年に発生した東日本大震災は、中越大震災 (平成 16 年) から 7 年の歳月を経た中越地域の震災当時の恐怖や苦難の体験を呼び起こしました。ある人は支援物資をかき集めて現地へ向かい、ある人は原発事故のあった福島県からの避難者を自宅で受け入れ、そして、ある人は今でも息の長い支援活動を続けています。

あれから 5 年が経過してもなお、東日本の被災地ではまだまだ多くの難問や課題が山積しています。今回、中越メモリアル回廊ではこれまで 5 年間に渡って中越の震災経験者がどんな思いを持って東日本大震災の復興支援を行ってきたのか、また、東北の被災地がこれまでどのような復興の道を歩んできたかなど、中越地域がこの 5 年間にやってきた東日本被災地への支援活動、住民交流活動などの歩みを「わたしたちは全国のから心温まる支援をいただいた。あの被災体験は決して忘れない。そして支援していただいたことも決して忘れない」をテーマに紹介していく企画展を開催しました。

(長岡震災アーカイブセンターきおくみらい 赤塚 雅之)

おぢや震災ミュージアムそなえ館と小千谷芒種庵の活動

小千谷市東部、中越大震災の震源地である旧川口町と旧山古志村に隣接する小千谷市塩谷 (しおだに) 地区の震災当時の被害は甚大で、家屋のほとんどが被害を受け、やむを得ず故郷を離れることとなった住民も多かったこの地域では、復興の過程で「故郷を離れる人たちが気軽に再訪できる場所を残したい、また、お世話になったボランティアさんと今後も交流を続けたい」という住民の思いから、取り壊される予定だった築 90 年の古民家を再生し、「芒種庵」(ぼうしゅあん) と名付けて地域の交流拠点として活動してきました。



◀平成 18(2006) 年 11 月、小千谷市塩谷の古民家は「芒種庵」と名付けられ地域の交流拠点としてオープンして以来、多くの絆がここで生まれてきました。

今回の特別企画展の開催に向けて、今年 2 月、おぢや震災ミュージアムそなえ館のスタッフと芒種庵を創る会のメンバーが宮城県に取材に入り、現在の被災地の様子など現地の語り部の取材を行い、芒種庵を創る会の活動紹介と小千谷そなえ館スタッフによる東北被災地取材の様子などを、おぢや震災ミュージアムそなえ館にて紹介しました。



鹿立浜の仮設住宅集会所でのヒアリング



被災当時の様子の聞き取り



そなえ館での展示 (第 1 部)



そなえ館での展示 (第 2 部)

熊本地震被災地支援活動のご報告

4月16日(土)～19日(火)



安達紙器工業の簡易更衣・授乳室を避難している子どもたちと一緒に組み立てた



4/18(月)

9:00後 おにぎり

昼 バナナ 子どもさん:10人
おにぎり(少)

夜 おにぎり

お米はバナナこちらに避難されている方が
ご寄付です。支援物資ではありません
ありがたく頂きました

避難所を運営する立場の方も被災されている
できること、あるものを持ち寄り助け合っていた



炊き出しの列に並ばずに
バナナの配布を自主的に手伝える子どもたち



新聞スリッパの作り方を教えながら
子どもたちとコミュニケーションを図った

四月一六日(土)から一九日(火)まで、長岡市危機管理防災本部職員一名、中越市民防災安全士会メンバー三名、当機構(中越防災安全推進機構)職員二名の計六名で、熊本市へ先遣隊として支援活動を行った。

一四日(木)の揺れに加え、一六日(土)未明に発生した震度7の揺れにより、被災エリアが拡大する中で、熊本市東区・益城町の避難所を八か所と、避難所にとどり着けず自主避難・自宅避難をされているエリアをまわった。

各避難所では、状況把握とエコノミークラス症候群予防の呼びかけを行い、そのうち要望のあった避難所では、長岡市の安達紙器工業が中越地震の教訓をもとに開発した段ボール製の簡易更衣・授乳室の設置を行った。

また、当機構と全国ネットワークでつながっている支援団体からの物資提供や炊き出しの申し出を、要望のある避難所へ繋ぐ活動も補助的に行った。

報道では支援の遅れが取沙汰されるが、物資が思うように届かないなかでも、自宅から持ち寄った食料で自主的に炊き出しを行い、疲労が溜まっていても、助け合いながら明るく頑張っている方がたくさんいらっしゃった。

ある避難所では、炊き出しの行列ができるなか、避難者から提供されたバナナに小中学生の子どもたちが付いて、自主

的に配布の手伝いをしていた。日常と変化した学校で抑え込んだ気持ちもあるだろうに、子どもなりに責任感を持って役割を果たそうとする姿に胸が熱くなった。避難者の方にとっても、きつと同じように映っているのではないかと。

日常のありがたみと、物や設備だけではない、人のつながりを含めた事前の備えの大切さを改めて確認した四日間となった。

これから避難生活の長期化が予想されるなかで、中越の方々が経験し、そこから生まれた知恵や教訓がきつと役に立つのではないかと感じている。

何か上から与える支援ではなく、寄り添い、立ち直る力を引き出していくような支援を。

震災から十二年を迎え、新たな日常を送る中越からできることを引き続き考えていきたい。

なお、四月三日(土)～二九日(木)にかけて、第二陣が避難所運営支援等の活動で熊本入りした。趣旨にご賛同いただける方は、支援金のご寄付をお願いしたい。

(地域防災力センター 松井 千明)

支援金の振込先

チーム中越 熊本地震支援募金

北越銀行 本店営業部

総合 2182629

地域防災のスペシャリストを育成します

「地域防災スペシャリスト（仮称）養成講座」について



中越地震をきっかけとして自主防災組織の必要性が見直されたことや、近年の東日本大震災や全国各地での豪雨災害の増加などもあり、自主防災組織の結成率は年々向上してきている。しかしながら、その一方で自主防災組織を結成はしたものの「どのような活動を行ったら良いかわからない」「防災活動がマンネリ化」「高齢化により担い手がいらない」といった課題を抱える地域も少なくないのが現状である。

地域防災力センターでは、このような地域の抱える課題に対応するため、平成二六年度より長岡市からの委託を受けて、地域の自主防災組織や町内会にアドバイザーの派遣を行っている。これまでの実績としては平成二六年には一五地域（四〇回）、平成二七年は一七地域（四四回）にアドバイザーを派遣し、地域における防災訓練の企画・実施の支援や、住民の防災意識の向上や防災マップ作成などを支援するためのワークショップを行い、地域の防災力向上に一定の成果を上げてきている。このような防災アドバイザー派遣の取組みは、地域特性に合わせて支援メニューの提供ができることや、専門家が直接住民にアドバイスや指導を行う点などにおいて地域課題を解消するには非常に効果的であるが、一方で派遣できるアドバイザーの人数や地理的な距離が制約条件となり、今後アドバイザー

派遣を希望する地域が増えてきた場合などに、すべての地域からの要望に対応出来なくなる可能性があるという課題を抱えている。

また、県内各地で地域の防災リーダーを育成するために、防災士養成講座などが開催され、多くの防災士や中越市民防災安全士といった人材が育成されてきているが、講座を通して防災全般の幅広い知識を身につけることはできないものの、現場で防災活動を指導できる専門的な人材の育成にまではつながっていないという現状もある。

そこで地域防災力センターでは、これらの課題を解消するために、「地域防災スペシャリスト（仮称）養成講座」の検討を始めている。この「地域防災スペシャリスト（仮称）養成講座」は、防災士や中越市民防災安全士などの防災の知識を有する人材を対象に、自主防災会や学校などにおいて防災教育の指導ができるスペシャリストを育成しようというもので、そのために必要な知識やスキルを身につけてもらうというものである。講座は「防災意識の向上」「防災マップ作成」「避難所運営」「災害食」といったテーマごとに開催され、育成された地域防災スペシャリストには、我々と共に地域でそれぞれのテーマについての指導を行うことが期待されている。

現在、災害食についての地域防災スペ

シャリストの育成を進めるために、災害食の専門家や行政、中越市民防災安全士会、日本防災士会新潟県支部などの皆さんと地域防災スペシャリストに求められる資質や知識、スキルのほか、地域で教えるためのプログラムや地域防災スペシャリストを育成するためのカリキュラムについて検討を進めており、今年度中には、第一回目の「地域防災スペシャリスト（仮称）養成講座」が開かれ、第一号の災害食の地域防災スペシャリストが誕生する予定である。

全国的に見ても防災分野の指導者は不足傾向である上、災害発生時にはこのような指導者は被災地支援に赴くことが多い。今後、全国各地で防災の指導ができる人材を育成することは急務と言える。しかしながら、これまで体系的に防災分野の指導者を育成する取組みは全国的にもほとんど行われていないことから、今後、全国各地における地域の防災力向上させるためにも、中越発で「地域防災スペシャリスト」の仕組みを確立していきたい。

（地域防災力センター 河内 毅）



平成 25 年度末に完成し、新潟県下の小中学校および関係機関に配布された「新潟県防災教育プログラム」。これをきっかけに、学校教育現場での防災教育の取組みが定着し、継続して実施されるよう、当機関紙では、シリーズ「防災教育の現場から」として、県内の小中学校での先進的な取組み事例を紹介してゆく。

新潟市「防災教育」学校・地域連携事業 平成 27 年度・平成 28 年度教員向け実施報告会兼研修 実施概要

○日時：平成 28 年 2 月 25 日（木）13：30～16：30 ○場所：新潟市役所白山庁舎
○対象：教員 70 名（当事業 H27・H28 指定校の小中学校 45 校、中学校 23 校、特別支援学校 1 校の防災・安全担当教員）

平成二七年度から「新潟市『防災教育』学校・地域連携事業」がスタートしている。三十一年度までの五年間で新潟市内の全小中学校一六七校で、防災教育の自校化を目指しており、単年度ごとに指定校を定めて、各校で防災学習を進めていく事業である。この事業の一環として、毎年五月と二月に、防災教育をテーマとした指定校担当教員向けの研修を行っている。

今回は、二月二五日に行われた研修会について報告したい。すでに一年間実践をした二七年度指定校三四校と、これから実践をする二八年度指定校三五校の担当教員が一堂に会し、前半は、事業概要（「ふるさと新潟防災教育推進事業」、「新潟市『防災教育』学校・地域連携事業」）や、中学校区で行われるミーティングの目的、新潟市防災教育コンソーシアムのサポート内容についての説明を受け（図一を参照）、二七年度実践校代表四校による活動報告を行った。

また、後半の時間は二七年度指定校と二八年度指定校のメンバーが協同で行うグループワークを実施した。防災教育について深く理解するため、「ジグソーメソッド」という手法を用いている。これは、協調学習または協同学習と呼ばれており、グループのメンバーがそれぞれ別々の資料を読み込んで、それを持ち寄って互いに自分が読んだところを紹介し合い、ジグソーパズルを解くように全体像を協力して浮かび上がらせる手法である（図二を参照）。

最初のチームは同行政区内で二つのチームに分け、まずは課題を共有し、その後行政区内で A B C の三つのグループに分かれて文献を読み込み

大切なポイントを共有していった。今回使った資料は、学校教員向けに防災教育をわかりやすく解説している文献三種類を選び、A・学校における防災教育には、どのような役割があるか、B・防災教育で育む能力とはどのようなものか、C・学校と地域が連携した防災学習にはどのような効果があるか、という視点で各文献を読み込み、それぞれで得た知識を最初のチームのメンバーで共有して、防災教育の可能性について深く理解してもらった。

話し合いの結果、「防災教育には思考力・判断力を高め、主体的に行動する力をつけることができる」、「日頃から地域社会と連携しておくことで災害時の被害軽減（＝減災）につながる」、「地域の安全や命の大切さ、他者を思いやる心を育むことで『生きる力』の育成になる」など、避難訓練だけでは得られない学びや効果もたらされる可能性が、防災教育にはあることがわかった。

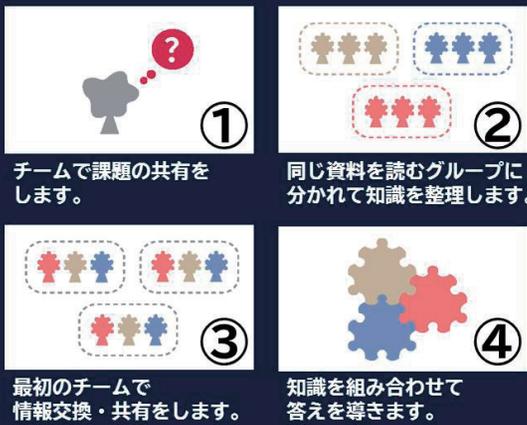
各グループでは、文献から得た知識の他にも、自校でどんな学習をしたのかなどの話にも及び、自然と教員同士の情報交換の場にもなっていたようである。

防災教育の可能性を知ると、既存教科や行事などでも防災学習の視点を加えることで無理なく実施できることがわかり、持続可能な自校化の取組みに結び付けることができる。「危機回避能力の育成」だけではない、防災教育の可能性や効果に気づくことで、児童生徒に一番近い距離で接している教員ならではの様々な工夫に期待したい。

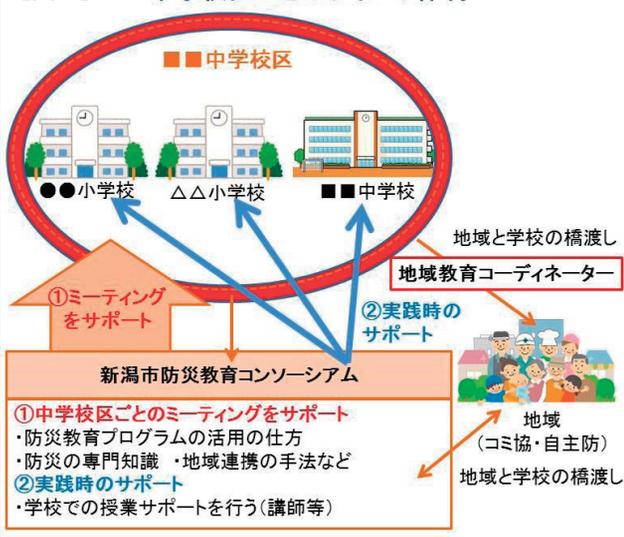
（地域防災力センター 関谷 央子）

【図2】 ジグソーメソッドとは？

1つの課題を解決するために・・・



【図1】 中学校区ごとのサポート体制



災害への備えを当たり前 子どもも若い人も巻き込んだ防災を

シリーズ 人

第3回

会田 理恵子 さん

地域活動サポートセンター柏崎主任。防災士として地域の自主防災組織の出前講座などに取り組んでいる。昨年からは、中越沖地震メモリアルまちからのスタッフとして施設の運営に参加している。

—中越沖地震発生ときは、どのような状況でしたか。

平成一九年の七月一六日に起こった中越沖地震ですが、三連休の最終日で子どもたちと買い物に出かけるための準備中で、二人の子どもはそれぞれテレビを見たり、キッチンでくつろいでいたりしていました。私は洗面台の前において、外からゴォーと地響きが聞こえてきたと同時に家の中が回るような感覚で、何度もしりもちをついて、立ち上がることもできない状況でした。キッチンにいた娘はテーブルの下に入っていて無事でした。当時は、防災についてはまったくの素人でしたが、中越大震災を経験して、非常持ち出し袋を、用意している程度でした。

—地震を経験して学んだことはありますか。

子どもが避難訓練を繰り返していたことで、けがをすることがありませんでした。机の下に隠れることで、娘が身を守ることができて、必要なことだと感じました。命に直結している事なので、大事なんだと改めて思いました。

—地域活動サポートセンター柏崎（以下…サポセン）ではどのような仕事をされていますか。

駅前サロンの募集があつて、たまたま仕事を探していたのが縁で働き始めました。別の担当だったので、サポセンが取り組んで止まっていた減災ガイドブックの編集を担当することになり、ダンボール二つくらいの資料を相手に勉強を始めました。分からないことだらけで、単語を調べることから始めました。このガイドブックを使った講座もサポセンで行うことになり、その必要から防災士の資格も取りました。当団体の理事でもある李仁鉄さんにいろいろと声をかけていただいて、いろいろな場所で行ういろいろな人とつながるようになりました。

—活動で気が付いたことはどんなことですか。

—この町内会でも、講座に出てくる人は、仕事を引退された高齢の方が多くいます。高齢の方ばかりで、更に高齢の方を支援することができるのかと考えることもあります。若い人にも参加してほしいと思います。また基本的な備えについては、何回も繰り返してやり続けてほしいと思います。簡単なことからでないとなかなか身につけません。一年に一度くらいは、備えについて思い出してもらえればと、備えを当たり前にするきっかけになればいいと思います。講座を行っています。

—これから取り組みたいことはどんなことですか。

子どもたちに必要な命を守る取り組みはやっていきたい。例えば修学旅行先でも避難経路を確認するような意識をもつようにまずは命を守る意識づけをやっていきたいと思っています。さらには、ちびっ子の防災。未就学児の子どもたちにも、意識づけできるようなこと、気が付くと防災を楽しくできるような取り組みもやってみたいです。

「インフォメーション」

【新人職員をご紹介します】

2016年4月より、2名の新人職員が加入しました。



永井 順子 (ながい じゅんこ)

長岡震災アーカイブセンターきおくみらい スタッフ

ひとこと：趣味はドライブと絶叫マシンです。車で山梨の富士急まで行きました。



大淵 朝香 (おおふち あさか)

川口きずな館 スタッフ

ひとこと：川口出身、お菓子づくりが趣味で、きずな館イベントでも調理してます！

【『越後川口 Rock Festival 2016 ~アマチュア・ミュージシャンによる音楽の祭典』開催！】

川口を中心に活動しているアーティストが集まる音楽イベントです。全9組のアーティストによる様々なジャンルのライブをお楽しみください！会場ではドリンクの販売もしております。

開催日：2016年6月4日(日)

入場料：無料

会場：杜のかたらい

主催：KAWA ROCK

共催：NPO 法人くらしサポート越後川口

出演予定：アダルト・シークレット・サービス/居酒屋まりこ/
K-FRIENDS / TAKU / デソレーション・ロー / 渡辺晃

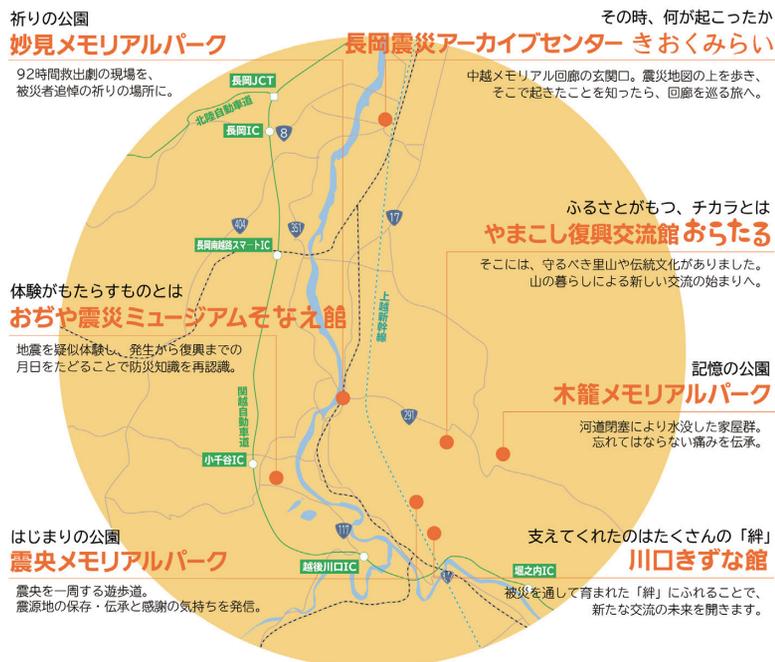
ピース・クルー / レッツゴー三匹ズ /

ブルーノート・ジャズ・オーケストラ

お問合先：川口きずな館 0258-89-3620



「中越メモリアル回廊全体図」



2015年
11月5日開館

中越沖地震メモリアル施設
柏崎市民活動センターまちから

旧公会堂の喬柏園(きょうはくえん)に市民活動センターと併せて整備され、地震の経験・教訓とともに、賑わいの再生に取り組む復興の町づくりを伝えます。

〒945-0066
新潟県柏崎市西本町 3-2-8
開館時間 9:30 ~ 21:00
メモリアル展示は 17時まで
休館日 毎週火曜日 年末年始
TEL 0257-22-2003
FAX 0257-22-2007

会員募集中!

当機構では、地域防災への取り組みや被災地への支援活動に賛同し、応援して下さる会員の方を募集しています。皆様のご入会をお待ちしています。

参加資格：当機構の活動に関心のある 18 歳以上の方なら、どなたでも参加できます。

会員特典：当機構が主催する研修・講座・イベント等のご案内をいたします。

年会費：正会員 5,000 円 個人賛助会員 3,000 円 団体賛助会員 100,000 円 (1 口以上)

※申込書は当機構ホームページよりダウンロードできます。

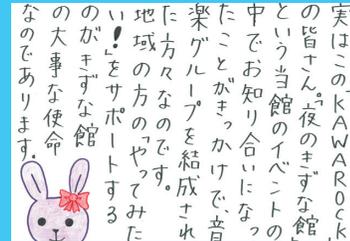
公益社団法人 中越防災安全推進機構 機関紙 <COSSS report> 第 14 号 2016 年 5 月発行

発行人：諸橋和行 編集：畔上凌 阿部巧 関谷央子 中村充 松井千明

〒940-0062 新潟県長岡市大手通 2-6 フェニックス大手イースト 2F 長岡震災アーカイブセンター きおくみらい内
TEL: 0258-39-5525 FAX: 0258-39-5526

E-mail: info@c-bosai-anzen-kikou.jp http://c-bosai-anzen-kikou.jp/

きずな館看板娘がおくる かわぐちの日常4コマ



まんがの作者

川口きずな館
新人スタッフ
大淵 朝香

施設のご案内

長岡震災アーカイブセンター
きおくみらい

〒940-0062
新潟県長岡市大手通 2-6 2 階
開館時間 平日 10:00 ~ 18:00
土日祝 10:00 ~ 17:00
休館日 毎週火曜日 年末年始
TEL 0258-39-5525/FAX 39-5526

.....

おぢや震災ミュージアム
そなえ館

〒947-0026
新潟県小千谷市上ノ山 4-4-2 2 階
開館時間 9:00 ~ 17:00
休館日 毎週水曜日 年末年始
TEL 0258-89-7480/FAX 89-7485

.....

川口きずな館

〒949-7503
新潟県長岡市川口中山 1441
開館時間 10:00 ~ 17:00
休館日 毎週火曜日 年末年始
TEL 0258-89-3620/FAX 89-3621

.....

やまこし復興交流館
おらたる

〒940-0204
新潟県長岡市山古志竹沢 2835
開館時間 9:00 ~ 17:00
休館日 毎週火曜日 年末年始
TEL 0258-41-1203/FAX 41-1204